

# 同窓生の広場

敬慕 井上敏夫先生に導かれ

……そして今

田中 信秋

私の在学当時の埼玉大学は、一般・専攻の授業は文理学部校舎で、教育・教育学の授業は教育学部校舎で受講いたしました。……。

花八手虻遊ばせて夕べとなる

斗潮

毎年一月二日は、先輩三人と共に井上敏夫先生宅にお邪魔し、令夫人の手料理を戴き、先生の若き日の思い出話や、教育・国語・国文関係、名所旧跡等の楽しいお話を伺ったものです。あの時の先生のにこやかなお顔が、鮮明に蘇って参ります。

先生に導かれての名所旧跡巡り、瀬浪ホテルで見た夕陽の美しき、花巻の賢治記念館、国上山良寛五合庵、井上靖ゆかりの湯ヶ島、遠刈田牧場夕食会……。

あの嵐の中、秩父山寮で開かれた埼玉国語の会・合宿研究会……。

羽生中学校での埼玉県国語研究会授業「屋根の上のサワン」。百間中学校での研究授業「清兵衛と瓢箪」。ご指導頂いた先生の温かい思い出。

昭和四十四年開催された、第三

十七回全国国語教育学会・全国大

学国語教育研究大会埼玉大会（浦

和会場）に於ける国語・文学教育

部会授業者に選ばれ、『故郷』（魯

迅作）を教材に、授業公開（バス

で百間中学校の生徒を引率）……井

上先生はじめ多くの先生、先輩、

仲間、教え子に支えられて、貴重

な務めを果たすことができました。

遠い昔の懐かしい思い出です。

その後、埼葛教育事務所指導主

事、小学校校長、文教大学勤務。

退職後は、畏友と長い間、登山

の日々を楽しんだものでした。

喜寿を過ぎ、是といった目的も

なく無為な生活をしていたそんな

折、絵師である教え子塩沢君から

「先生、私は、京都妙顕寺、三重

四天王寺の仏画を完成し、現在、

池上本門寺の屏風絵に必死で取り

組んでおります。先生、『萬葉集』

研究頑張ってください。」の叱咤

激励を貰う。心から嬉しかった。

久方ぶりに萬葉集関係の書を取

り出し、諸説の整理を試み、更に

『万葉集・東歌・諸注釈集成』を

私のライフワークと定め、その『第

一集』を令和四年一月に刊行。現

在、第二集の完成を目指し、八十

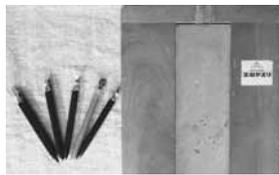
九の坂を駄馬に鞭打ち登っています。

（昭和三十一年卒）

死語となったガリきり

本田 重次郎

昨今の事務機器の進歩の大変な速さは大きな驚きで、実際について行けないものがあります。以下、具体的に記してみたいと思います。ガリきり



鉄筆とヤスリ

ガリ版のヤスリの上にロウ原紙を置いて、写真にあるような鉄筆の中から文字用を選び、ガリガリと字を書くわけです。そ

の時の音からガリ版というのかも知れませんが、孔版という言い方が正式かも知れません。この原稿づくりが大変で、下のやすりに負けてしまい、文字が文字らしく書けないのです。教育実習に行つて学習指導案を作る時がガリきりのスタートだった気がします。その後練習を重ね慣れるに従つて何とかしつかりした読める文字が書けるようになりました。ベテランの人はつぶしの鉄筆で絵も描きます。気を付けられないといけないのが、線を引く時は線引き用のやすりを使うこと、文字用のやすりで線を引くと原紙が切れて穴が開いてしまひ、印刷に耐えられないことになります。また、夏の暑い時には口

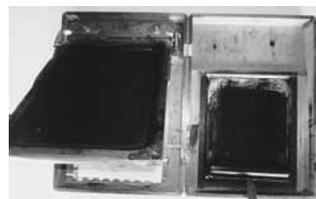
ウが溶ける心配があるので、冷蔵庫に入れて保管します。

印刷

原稿が完成したら次は印刷です。基本は写真にあるようないわゆる「謄写版」という道具です。インクを付けたローラーを持って一枚ずつ印刷します。クラスで文集を作ったり、各種行事のしおりを作ったりするのはこの方法が多かったと思います。印刷部数が多い時は輪転機という印刷機械を使用します。この輪転機もハンドルを手で回すタイプと印刷のスピードを調節できる電動タイプがありました。輪転機もインクの調節が肝心で、インクを出しすぎるとドラムにペタンペタンと張り付いてしまい、一枚一枚取りながらの非能率的な作業になり、印刷で四苦八苦の状態になってしまいます。調子が良ければ大変リズムカルに印刷作業が終了します。

ワープロが出現したが

初期のワープロは画素数が少なく荒削りの文字で、ディスプレイも小さいものでした。半世紀前は皆このような状態の下で仕事をしてきたものです。（昭和四十三年卒）



謄写版



## 優先の順位を変えた出来事

久保 忠太郎

そんなはずはない。目の前が真っ暗になり、言葉が出ませんでした。地元の病院でがんが疑われ、したので覚悟はしていましたが、まさか二年の余命とは。さすがに不安が先立ちました。帰路も子供が慰め励ましてくれる中、いろいろなことが頭を廻りました。余命宣告には前提があると思います。選択肢に「死」という現実がつきまとうので心境は複雑でした。後日、治療の方法が示されましたが、罹患部位から内視鏡での手術は出来ないと言われました。選択肢は、副作用等を含め致死もあり得る根治手術(完全除去)か、再発も覚悟のへぎ取る手術か、どちらにせよ大きな手術になることでした。スタッフを信じ、根治手術をお願いしました。

命を落としています。全死亡者の約三割を占めているとのことであり、昭和五十六年からがんは死因の一位となっております。さらに生涯でがん罹患するリスクは年々増加している現状があります。多くの人が、今日より明日に期待しながら人生を歩んでいます。だからこそ日常や未来を断ち切るかもしれない天災や戦争、そしてがん罹患等は日常とは到底相容れないものです。天災や戦争は個人の力では短期的には無力に近いかもしれませんが。しかし、がんは自分の強い意志のもとに正しく対応することで、よりよい明日が期待できます。小生ががん罹患者とは知らなかった孫が、小学校でのがん学習の話をしてくれました。がん検診等での早期発見・早期治療でもはやがんは不治の病ではないと死別した妻を思い出さすような話をしてくれました。孫の思いは、今小生への後押しにもなっています。がんは不治の病と恐れる世代にも、日進月歩の医療技術等を通して、命の意味や生き方を考えることができるようになりました。

余命宣告、がん手術等を経験したからこそ理解できた事、感じた事等がたくさんできました。これらのことを大切にしながら、悔しい思いをした人の分まで、残りの人生を有意義に歩んでいければと思っています。(昭和四十七年卒)

## 恩師の支え

野口 英世

大学を卒業して半世紀近くになった。小学校、中学校、高校、大学とこれまでたくさん先生の世話になった。私の高校時代のことを少し書いてみたい。

私は高校に入っただけでなく、郷土部という部活動に入った。友達と相談して少しの間様子をみて決めようと思ったからだ。仮入部が終ろうとしていたある日、応援団から勧誘があり、「運動部にあらずれば人にあらず」というような説明に、自分もどこか運動部の方がいいのではと思っていたのでサッカー部へ転部した。担任のS先生は大丈夫なかと心配してくださった。二年になって六月一日の衣替えの初日、私はバイクで交通事故に遭った。骨折はなかったものの打撲や擦過傷で二週間ほど入院した。退院して間もなく担任のN先生が自宅まで見舞いに来てくださり、怪我の具合や身近に迫った中間テストの心配までしてくださった。N先生は、この時私の父と進学についての話もしていたように思う。学校に復帰して間もなく中間テスト、しばらくして全校集会があり、K君がバイクの事故で亡くなったことを知った。友達と二人乗りで後ろに乗っていて、カーブが曲がり切れず大きな事故になったということだった。もしかしたら

自分もそうなっていたかもしれないと思いつつK君の冥福を祈った。三年生になっても相変わらず部活動に明け暮れていたが、いよいよ進路を決めなければならぬ時期にさしかかった。家では進路の話はほとんどしなかった。祖父も父も私が家の仕事に就くものと思っっていると勝手に判断していたからだ。三者面談が近づいたある日、私はS先生に相談に行った。「私は進学を希望しているのですが、たぶん親は反対すると思います。今まで進学したいと親に言ったことはありません」と。S先生は埼玉大学を卒業した体育の先生でバレーボールの国体選手だった。一年の時も担任していたのでサッカー部に転部の時も勉強がついていけるかなど親身に心配してくださった。今回は進路選択に関してなのだが、「私が親御さんに話してみよう」と言ってくださった。三者面談の当日、私は恐らくほとんど口をきかなかったと思う。「進学したいんだろう」という先生の問いにかすかに頷いただけだった。父は祖父や自分の考えを先生に話したが、S先生が熱心に父を説得してくださった。「条件は公立大学だけ、だめならあきらめる」だった。この時のS先生の父への説得がなければ私は大学に行ったり、教員になったりすることはできなかったと思う。唯々先生方に感謝し

かありません。(昭和五十年卒)

## 私の歩んできた道

山口 哲司

「先生になりたい」そんな志をもって、埼玉大学に入学し、小学校教員を目指しました。誰からも好かれる熱血教師をイメージしながら楽しく勉学に励んでいました。印象に残っているのは、新井重三先生の博物館学芸員の講座でした。全て受講し最後に、科学技術館で博物館実習を行うことができました。当時の最先端科学のサイエンスショーの助手をしたり、特別展示のスーパーカーに乗りしたりすることができました。資格はチャンスなので、小学校免許、学芸員、幼稚園免許、司書教諭などを取得しました。卒業までに、取得単位が百八十単位程度あったと記憶します。附属小学校での教育実習は、厳しかったですが、金子美智雄先生から授業の組み立てを学びました。それは、芸術作品を作成するように没頭することで得られるものでした。長い時間を、実習生と向き合って頂きました。今でもそれは基本として生きています。

教職に就き全力投球していく中で、何か心に引っかかるものがありました。それは「東京の大学で更に自分を向上させたい」でした。そこで、翌年、六年生担任でしたが、東京理科大学の二部に聴講

生として通いました。年休一時間で電車を乗り継ぎ、飯田橋にぎりぎり間に合う生活でした。東京理科大学出身の教頭先生から「相当な困難があるが頑張れ。」と言われ、気持ち引き締まりました。

東京理科大学の、実験・実習仲間との関わりでは、大手の〇〇金属や△△化粧品研究所勤務の人たちが「教職に就きたいので通っています。」「免許が取得できて教員採用試験に合格したら、今の勤務先を辞めて、高校の理科教師になりたい。」と言った人が何人もいました。それほど教員になることに魅力を感じる時代でした。

私は、埼玉大学、東京理科大学の取得単位と、通信大学の単位で最終的に、中学校の理科・英語の免許も手に行うことができました。また、運良く、狭山市立教育センター指導主事の時は、理科担当の他に、語学助手(ALT)も担当しました。

その後、市内の小・中学校で校長を勤めました。中学生の進路面接では、幼児教育や科学技術にとっても人気が高く、学んだことを十分に活かすことができました。

退職後は、県内の教員養成大学で非常勤ではありますが、小学校理科教育、英語指導の担当をしています。かつての免許が役に立ちました。

(昭和五十三年卒)

## 大切な言葉

来嶋 実樹子

「みんなちがってみんないい」誰もが耳にしたことのある金子みすゞの童謡集「私と小鳥とすず」の中のフレーズです。私はこの童謡集に大学四年生の時に出会いました。「幼児文化論」という講義で矢崎節夫先生に教えていただいたからです。

幼稚園教員養成課程の授業は、どの授業もとても楽しかったことを覚えていきます。ピアノや声楽、絵本作りに折り紙百種類の宿題、心理学も教育学もどれも私が学びたかったものばかりで、とても充実した学生生活を送っていました。が、矢崎先生の「幼児文化論」は選択してよかったと心から思える講義でした。矢崎先生の講義を選択していたのは数人でしたが、みすゞさんの三冊の手帳を発見し、みすゞさんの残したたくさんの童謡を詩集にして出版された矢崎先生は、三冊の手帳に辿り着いた経緯やみすゞさんの詩の素晴らしさを熱く語ってくださいました。こんなに素晴らしい講義を数人で聴くのはもったいないと思いました。が、大学を卒業してからも矢崎先生は、さまざまな催しの際に案内をくださり、ずっとみすゞさんを通してつながっていました。

私は、公立の幼稚園に就職することを希望していましたが、当時

は小学校の採用枠も少なく、ましてや幼稚園は採用すらなかったために、養護学校で教員生活をスタートしました。小さな成長や喜びを大きな幸せと感ずることができた四年間でした。その後小学校に異動し、通常学級の担任をしましたが、汗いっぱいになって外遊びする姿や美しく響く歌声、一人一人の子供のもつ意欲や成長しようとする力に、日々感動していました。教室の中には、みすゞさんの「わたしと小鳥とすずと」の詩をいつも飾っていました。

その後、国語の教科書にもみすゞさんの詩が掲載され、矢崎先生も山口県にある「金子みすゞ記念館」の館長をされてお忙しい日々を過ごされておりましたが、校長になったばかりの時に、子供たちのためにみすゞさんのお話をしに学校に来てくださいました。子供たちにわかりやすい言葉で、みすゞさんの思いや、みすゞさんの詩に触れた子供たちの心の動きについてお話してくださいました。(矢崎先生はいつも「みすゞさん」と優しくお話されます。)

もうすぐ三十八年間の教員生活が終わりを迎えようとしています。みすゞさんの言葉や矢崎先生の言葉はずっと心の中に大切にしています。もちろん今も校長室前に「わたしと小鳥とすずと」を飾っています。

(昭和六十年卒)

## しいの木林の「贈り物」

長江 清和

私が教諭として十年、そして副校長として三年の年月を勤めた附属特別支援学校は、今年度、開校五十周年という記念すべき年を迎えました。まだ新型コロナウイルス感染症の心配が拭いきれない状況でしたが、十月十五日に記念式典が挙行されました。人数を制限しての式典でしたが、幸せなことに私も招待され、心温まる式典に参列することができました。附属特別支援学校の教職員と保護者、在校生の思いが、記念のビデオ映像や会場に展示された作品等から伝わってきました。

この式典には、三十周年に高等部在籍だった卒業生が参列していました。特別支援学校は小学部・中学部・高等部の十二年の教育を行う学校なので、四十周年に小学部の一年生と二年生だった児童は、今年度高等部二年生と三年生に在籍しています。そういう事情もあり、三十周年のタイムカプセルは、二十年後の五十周年に開けることにしたのでした。タイムカプセルは、学校のシンボルとなっているしいの木林の土管の中に埋めてありました。そしてマスコットキャラクターの「ハッピーくん」がしいの木林から運んでくる映像の演出と共に、式典会場に運ばれました。タイムカプセルは式典に参列した卒業生によって開けられました。二十年前の学校の様子が写真、

作品、音声データなどから蘇り、タイムスリップしたような雰囲気会場一杯に広がりました。

タイムカプセルを開けた卒業生の中に、埼玉大学の総務課に勤務している卒業生二名と大学生協に勤務している卒業生一名がいました。現在大学に勤務している私は、彼らの姿を時々キャンパス内で見かけることがあります。特別支援学校の卒業生が元気に働く姿を見たり彼らと挨拶を交わしたりすると、私も元気が湧き出てきます。

そういう時に私は、担任した卒業生のことを思い出します。私が高等部の担任として社会に送り出した卒業生は、もうアラフォー世代になっていきます。十年ぐらい前までは、毎年同窓会を行っていましたが、この十年ぐらいは年賀状のやりとりが主となっています。その理由は、保護者の高齢化があり、特にこの数年は、集まることを自重しないといけない状況もあります。そういう中でも元気に頑張っている便りに、私自身励まされます。そして小学部で担任した卒業生も三十代になっていきます。風の便りに、元気に頑張っている様子が時々届きます。

当日の記念品の中に小学部で担任した卒業生が働く事業所のクッキーが入っていました。食べてしまおうのは惜しかったのですが、お気に入りのコーヒートを淹れて美味しく頂きました。しいの木林の「贈り物」は、私に素敵な時間を与えてくれました。(昭和六十一年卒)

## 残された日々を賭けること

伊藤 秀一

定年は伸びることとなりましたが、あと四年で区切りの六十歳を迎えます。

過日、令和五年度小学校教員採用試験の全国平均競争倍率が二・五倍となり、史上最低を更新したことが報じられました。中学校や高等学校でも同様に倍率が低下しています。

一般的に三倍を割ると質の低下が危惧されると言われています。このことは、確かに憂慮される事態かもしれません。

私たちの年代が、在学・卒業後しばらくの間は、現在の倍以上の倍率でした。中学校や高等学校に至っては、十倍以上の狭き門でした。まさかこのような日が来ることを、そのころの私には想像できませんでした。

現在の若い人たちに、教職の魅力ややりがいなどを十分に伝えられなかったことについて、大学で二年間ほど教員採用の支援に携わった経験も含めて、私自身、少なからず責任を感じています。

競争倍率が高かった当時、臨時的任用を何年も続け、結果、採用を断念された方も少なくありませんでした。その方々は、現在のこの状況をどうご覧になっているでしょう。

運よく採用が叶い「定年退職」という言葉が、より現実として感じられる中、残された日々私にできることは何でしょうか。

教職に限ったことではありませんが、常々私は「気概」と「使命感」こそが、教員を成長させ、矜持を支えたと信じ、三十年以上教育界の末席を汚して参りました。確かに確率論からすれば、「三倍を割ると…」は正論であり真剣に受け止め、今後の採用試験における受験者数の増加に努めなければなりません。

一方で、仮に低い倍率でも、有能な人材が志望するならば、教育の未来は決して暗くありません。或いは、採用後も研修等を丁寧に実施することで、質の高い教員が育つのではないのでしょうか。現に、私が勤務する小学校には毎年一、二名の新採用者が配置されますが、皆意欲に満ち、子供たちを高めようと、日々真剣に教育活動に携わっています。

働き方改革・コロナ対策・多様化への対応など、現在の教育現場が抱える課題は山積しています。それらの解決に対策を講じながら限られた日々ではありますが、「気概」と「使命感」に満ちた若者が、教職に魅力を感じ、目指してくれよう、全力で教育界の一隅を照らしていきたいと考えています。

(昭和六十三年卒)

## 余徳の力と親切に感謝して

白石 徳一郎

余徳の力という言葉がある。人生の前半には親の徳の力があり、人生の後半では自分の徳が子供たちの力になるという意味で、「あなたのお父様のお陰です。」「おじい様にはお世話になりました。」等の言葉にも、親祖先の徳の力が感じられる。

これは、学校においても同じことが言える。校長という立場で考えると、校長一年目は前任の校長先生のお力で、二年目から自分の力が試されると言えるかもしれない。しかし、長い目で見ると、地域とのつながり等は防犯ボランティアを十年以上されている方がいたり、学校運営協議委員会が二十年前のPTA会長であったり、これまでの歴代の校長先生方をはじめ多くの教職員の皆様が築かれてきた地域からの信頼のお陰で今があると考えられる。歴代の校長先生方、本校に関わりのある全ての教職員の皆様からの余徳の力が今も残っていることに気付く。

余徳の力を失うのか、生かすのかは自分次第であり、感謝の気持ちを大切にしながら頑張りたいと思っている。

勤務校は、ちょうど十年前にユネスコスクールに承認され、今も登録されている。ユネスコスクー

ルに承認されるためには、過去十年間の取組が評価されるので、さらにその十年前からの諸先輩方の実践の賜物である。しかし、当然ユネスコスクールとしての教育活動を継続していないと登録解除となり、コロナ禍もあって活動実績がほとんどなかったため、昨年度に登録解除になるとの予告連絡があった。我が校がユネスコスクールであることを知る人も少なく、人知れず灯が消える危機にあったが、先人が残してくださった名誉を生かしたいと考え、ユネスコスクールの復活に舵を切った。

平成九年から約二十年間続いていたサクラソウの栽培を、「田島ヶ原サクラソウ自生地を守る会」の方のご尽力により再開した。校庭の樹木や雑草が伸び放題であったが、PTAと地域の方が何度も環境整備を行ってくださり、見違えるような校庭になった。

なぜ、ここまで協力してくださるのか、PTAや地域の皆様のご親切に戸惑いを感じる程であったが、子供たちのためにいい学校であってほしいという期待と、学校が変わる喜びなのだと思付いた。

今は、たくさんのご親切を頂くことに感謝して、期待に応えられるよう、充実した教育活動と成長した子供たちの姿をお見せすることで恩返しをしたいと教職員と頑張っている。

(平成四年卒)

## われ以外みなわが師

塩崎 陽子

「われ以外みなわが師」。小説「宮本武蔵」で有名な作家の吉川英治の言葉で、私の教育信条です。自分以外のすべての人は私の師であり、出会うすべての人から謙虚に学び続ける姿勢を持ち続けていきたい。令和三年度から校長として学校経営にあたっていますが、この教育信条を本校の学校教育目標である「学ぶ 鍛える 高めあう」とも関連付けながら、生徒たちにも教職員にも、そして、保護者や地域の方々にも伝えていきます。

令和四年度からは、目指す学校像を「一人一人が尊重され、多様性を認め合う学校」と新たにしました。今、世界で取り組んでいるSDGs(持続可能な開発目標)は、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現を目指しています。学習指導要領においても、学校は一人一人の生徒が持続可能な社会の創り手となることができるとしています。生徒一人一人が自分のよさや可能性を認識でき、あらゆる他者を価値のある存在として尊重できるように、家庭・地域・小学校と一体となって教育活動を推進しています。また、この目指す学校像を実現するための一つの取組として、令

和四・五年度に、「久喜市版未来の教室構想」を踏まえた、生徒一人一人の可能性を引き出す個別最適な学びの実践」を研究主題として、市の研究委嘱を受けました。

研究の中心となるのは、研修推進委員会です。校長と教頭以外は二十代・三十代の若手の教員で構成されていますが、柔軟な発想やICTの活用スキルなど、私も学ぶことばかりです。研究の歩みはゆっくりですが、研究の組織編成や仮説の設定・検証などについて委員の先生方が自分の事として研究をつくり上げ、それを全教員に浸透していく姿を見られることが楽しみでもあります。また、他の会議では、校長からの指示や伝達判断が求められますが、研修推進委員会では、私も一委員として意見交換をし、一緒に学ぶことができます。このときに思うのは、大学時代に金本研究室で数学教育について仲間とともに研究したこと、附属中学校での教育実習で授業の本質についてご教授頂いたこと、附属中学校に勤務して実践研究を深めながら多くの先生方からご指導頂いたことなどが、自分の糧となっているということだと思います。改めて、「わが師」に感謝いたします。そして、これからも出会うすべての人から謙虚に学び続けます。

(平成七年卒)

## 新しいスタート

杉山 愛

私は、今年の四月、所沢市から川口市の学校へ異動し、育休を経て職場復帰しました。三人の未就園児を抱えての復帰を決断するまでにはたくさん悩みましたが、「育児休暇」という制度を利用し、三時半に帰宅。「働き方改革」の推進が叫ばれているのを味方に、堂々と帰宅しています。ワークが生きがいであった頃は「働き方改革」と言われても納得いかない部分もあったものの、ワークライフバランスを考えるようになり「働き方改革」の恩恵を受けていると感じています。職場の皆さんの理解と優しさのおかげで、私のような立場の者もやりがいをもって働ける場があることに感謝しています。

えとなつています。久しぶりに戻った現場は、ICT環境が一変し、一人一台端末、オンライン授業が当たり前になっています。周りの先生方が簡単にこなすことも、私にとつては大変。「ICTを鉛筆やノートと同様に」とのことです、まずは自分がタブレットを文房具化しようと度々持ち帰っています。理科のある単元で、タブレットをノート代わりに使用させてみました。初めは喜んでいた子供たちも、終わるころには数名に「ノートに戻して！」と言われてしまいました。少しほつとした気持ちにもなったのですが、将来子供たちが自分で選択をしてタブレットを活用できるように試行錯誤しなければなりません。休み時間にタブレットを使用して過ごす子供もいます。その光景にはどうしても違和感を覚えます。そもそも「なんで学校に行かなくていけないの?」「オンライン授業で充分」と言われたら私はなんて答えるのでしょうか。子供たちにとって何が良くて何が悪いのか、迷い戸惑ってばかりです。毎日の授業だけでなく、「学校教育」そのものを広い視野と多様な角度からとらえ直す必要が出てきました。不安が大きかった新しいスタート、今は不思議と初心に戻ったかのように仕事をしている自分がいます。教師としての第二ステージ、がんばります。(平成二十年卒)

## 五年目を迎えて思うこと

阿部 香織

私は養護教諭として高校に勤務しています。初任校での勤務も五年目になりました。原稿依頼を頂き、学生時代や着任当初の私のように、自分の進路や仕事に不安や迷いがある後輩の皆さんへ、五年間働いて、気付いたことや今の心境をお伝えできればと思います。勤務校では、七月にコロナ禍で初の宿泊行事となる林間学校を実施しました。久しぶりの宿泊行事かつ今年度からスタートした行事であったため、感染症予防対策や体調不良者発生時の対応、保護者向けガイドラインなど、学年や管理職と何度も打ち合わせを行い、一から作り上げて出発しました。そんな林間学校を無事に終えて気付いたことは、「自分の担っている仕事の意味が分かると、やりがいを感じる場面も増える」ということです。大きな怪我や事故無く行事を終えられること、不測の事態が起こっても引率団としての的確な判断、対応ができること。これは当たり前ではなく、緊急時対応の取り決めや生徒への事前指導、保護者への周知など、準備を尽くしたからこそ得られる安心・安全だということを、この行事の立ち上げから関わって実感しました。

それまで、やりがいを感じたのは生徒に直接関わる場面がほとんどで、興味も偏っていました。しかし、自分にとつては当たり前の日々のルーティーンの中にも、教育活動の安心・安全を下支えする役割があると気付き、視野が広がるとともに、どんな仕事にも丁寧に取り組もうと改めて思いました。この五年間、情けないことも失敗もたくさんありました。できないこと、分らないことに直面しては、勉強してできるようにしていくことの繰り返しでした。しかし、そうやって今居る場所まで求められることに応えていけば、できることが増えて、自分のやりたいことにも挑戦できるし、自然と方向性も見えてきます。「何に向いているかなんて頭で考えていても分からない。道はきつと、出会った人たちが教えてくれる。」(西原理恵子著『女の子が生きていくときに、覚えていてほしいこと』より)こんな言葉もあるように、今まで出会った方々から学んだことで今の私が形作られていることは間違いありません。中でも、大学在学中に学んだこと、初任の年に大変お世話になった先輩養護教諭から学んだことは、私の背骨となり、ずっと私を支えてくれています。これからも、道に迷ったときは原点に立ち返り、自分にできることを積み上げていけばきっと大丈夫。五年経った今は、そんなふうに思えるようになりました。(平成三十年卒)